
魔女っ娘が家にやってこない！（親仁変）

池田コント

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

魔女っ娘が家にやってこない！（親仁変）

【Nコード】

N1088A

【作者名】

池田コント

【あらすじ】

冴えない1人暮らしの学生、季彦の元にある日魔法の国からの使者がやってきた。しかし、それはプリーツスカートを履いた可愛らしい魔女っ娘ではなく、マスコットにありがちな珍生物でさえなく、ステテコをはいたおやじだった。季彦君の騒々しい日々が始まる。

魔女っ娘が家にやってこない！（親仁変）

第1回：代わりにおやじがやってきた（前書き）

あてんしょんぷりーず。

これは可愛らしい少女のオトボケ魔法とかで「モエモエ」とか言ったりする小説でもなければ、王道的な魔法少女の活躍を描いたものでもありません。

サブ主人公はおやじです。

そういう期待感を持たずにお読みください。

魔女っ娘が家にやってこない！（親仁変）

第1回：代わりにおやじがやってきた

杉で作られた安っぽい扉を開くと中にはおやじがいた。

「バーコード頭とは言わないまでもかなり頭頂部の髪がさびしくなっていて、微妙に整ったちよび髭を生やしている。まだ冬ともいえる時節なのにベージュ色のステテコとドクダミ茶みたいな色の腹巻き以外には靴下も履いておらず、これで黒ぶちの丸眼鏡でもつけければまるで昔のコメディアンのおふん装そのままの姿だ。街角で百人に聞けば九割方「おやじっばい」と答えるだろう。」

そんなイメージが凝縮したようなおやじが俺の部屋で茶をすすっていた。

「言っておくが、俺のおやじではない。俺の実のおやじはもっと弱弱しく、なんていうか「柔和なおじさん」って感じた。そもそも俺にこのおやじの顔に見覚えがなかった。」

「よお、遅かったな」

「面識がないというのに、そのおやじは気安く声をかけてきた。1回外に出て号を確かめるが間違いなく俺の借りているワンルームだ。」「なんだ、暖気が逃げるからそんな開け閉めすんなよ」

「まるで部屋の主人であるかのように振舞うおやじ。俺はつい「あ、すいません」と謝りそうになって気を取り直した。」

「いや、ていうかあなた誰なんです?」

「ああん? なんだお前アレか。なんにもわかってないのか。んじや頭の悪いお前にもわかるように簡単に教えてやるよ」

「おやじの言葉選びには腹が立たないでもなかったが、ここは素直にうなづいてみる。」

「つまりな、おれはアレだ。こことは違う魔法の世界クリーミィランドからやってきた激烈魔法少女ルンルン・チャーミィ……の代理だ」

「は?」

「正確にはチャーミィのおやじだ。娘が風邪ひいちゃったんでな。ま、マジカルフリフリパワーでなんでも願いはかなえてやっから安心しとけ、な」

そう言っつて、おやじは小さな女の子向けの魔法少女変身グッズだかなんだかに入っつていそうな星と赤い宝石のついた安っぽいデザインのピンクのステッキを取り出すと、それでまごの手のように肩をたたく。

俺はおやじがそんな頭のわいたとしか思えないおやじの姿をぼんやり眺めながら理解した。

ああ、これは夢だ、と。

なんて、悪趣味な、早く目を覚まさないと。

そう思っつた俺は拳を強く握り、力の限りにそのおやじをぶん殴っつた。

おやじは「ぼへらっ」とか変な叫び声を上げて畳の上にたたき伏せられた。

なんてこった。

手ごたえがある！

ということはこれは夢ではないのか！

びくびく痙攣しながら口からは力二のようにあぶくを吐き続けるおやじを見つめながら、俺は言い知れない不安を感じ取っつていた。

第2回：だつておやじは18歳以上

「てんめ、お前見ず知らずの他人を殴っていいと思ってるのか。親の顔が見てみたいわ」

おやじは目を覚ました途端俺にぷりぷりと怒って説教し始めた。他人なら不法侵入するなよ、と俺は思ったが、話がこじれそうなのでやめた。

俺の名前は林季彦。都会の高校に通うために単身上京し、一人暮らしをしている。今は学校が春休みに入っているため空いた時間を利用して日払いのバイトをしてきたところだ。あまり派手に金を使う方でもないが、仕送りが親のパチンコの儲け具合で変わるため安心してられないのだ。

本屋の棚卸しを手伝い、くたびれたからさっさと風呂にでも入ろうと帰ってくると、このおやじがいた。

自称魔法の世界からやってきた、魔法少女ルン・チャーミーの代理人。

その実、春になったから脳の湧いたらしいステテコはいたおやじ。正直、正体とかなんでもいいから早く帰って欲しい。

俺はおやじの怒りを煽らないように適当に謝って早々に帰ってもらうことにした。けれども、おやじは二転三転どうでもいい話を続けている。

「……だからな、そのときおれは言っちゃったのよ。穴が3個もあるんじゃ、それは本物とはいえねえってな！」

「……あの、ご熱弁のところすいません。それで、用件というのは……」

「ああ、そう、そうだったな。じゃ、茶でも飲みながらそのことを話すか」

お茶の位置は既に物色されていて知られているらしい。すっかり部屋の主人であるかのような振る舞いである。

「で、だな。お前さ、こないだ願っただろ」

「なにを？」

「ほら、西松屋の駐車場で」

「覚えてませんが……」

「覚えてる。とにかくお前は願ったんだよ。ほら、ダチ公と二、三人集まってだな。『彼女ほしーっ！』ってな。へ、情けねーこと願ったわけよ」

「そ、そんなこと！ 願ってなんか！」

「ないってか？ 嘘つくんじゃねよ。ちゃんとベビー服の女神様が願い事を聞き届けたんだからな。お前、女神様の耳が遠くなつたとか言いやがるつもりかよ」

……へ？

「いや、言いませんけど。今なんて言いました？」

「なんだ耳が遠くなつたのはお前か。いいか、だから、女神様がお前の願いを聞き届けてくださったのよ、西松屋の駐車場でだな」

「なんの女神様？」

「ベビー服だつってんだらうが」

……。

日本古来の信仰には万物には神が宿ると信じられている。火の神や水の神から木の神、お米の神、果ては便所の神に同人誌の神。

しかし、ベビー服にも神様が宿っているとは。人類はここまできましたよ、おかあさん。

「その女神様つてやつぱりベビー服着てるの？」

「なにがやつぱりなのかわからねーが、着てるぞ。女神様は自ら進んでベビー服の神に志願しなさつたんだからな」

「子供なの？」

「へっへ、それがよ。パツンパツンいろっペー女だよ。ポタンなんかしょつちゅう弾けとんでんのよ、胸とかズボンとかな、これがまた触りたくなるくらい柔らかさうな体だよ。新体操とかやってたそうなんだな。胸なんか、ちよっと動くだけでこー、ぷるんぷる

「んてな震えて……てめ、なに言わせんだよ、エロガキ」

おじさんが勝手に言っていました。

でも、そんな女神様がいるならどうせなら神様本人に来て欲しいなんて言ったらばちが当たるだろうか。少なくとも、こんなおやじが派遣されてくるなんてサギのような。

「だけど、お前、おれが来てラッキーだったな」

なにがラッキーだ。

「おれの娘は15歳だよ。親のおれが言うのもなんだが、かわいい顔してるくせしておくてだよ。いまだにファーストキッスがどうにか言ってるのよ。たく、ありゃ、かあちゃんに似たんだな」

ピュアそうな子だなあ。やっぱりそっちが良かったよ、おやじ。

「ファーストキッスのなんて、生後一週間でおれがやってやったのによ」

最悪だ。おやじ。

「でも、そんな娘だからよ。だめなんだな、うん」

「なにがですか……」

俺はかなりへこんでいた。

本当なら、そのピュアでかわいい魔法少女が俺の願いをかなえるためにやってくるはずだったのだ。

ピュアとかかわいいとか、そういうのは人の価値観にも左右されるから、置いておくとしても、少なくとも、この畳の上に正座してステテコおやじと2人きりという状況は避けれたわけだ。ああ、嘆息、感嘆詞。

「だって、お前、考えてみるよ、俺は大人だぞ？」

大人じゃなくても良かったです。

「だから？」

「頭の回転が遅いやつだな。いいか、つまり言い方を帰るとだな。

おれは18歳以上だったことよ」

18歳以上。

18歳以上……？

18歳以上！

それは魅惑の言葉。社会に歴然とまたがる断崖！ お子様なんて
門前払い、いつの時代も、年頃の子達が熱望してやまない禁断のヴ
エール！

『あなたは18歳以上ですか？』

なんとインターネットでその文字を見たことか！

なんとその壁を乗り越えてきたことか！

18歳の誕生日。それでもついつい変装せずにはいられず足を
運び、地元の書店で雑誌を受付のおばさんに渡したときのドキドキ
を思い出す。

そうか、そうなんだ！

「お父様！ 来てくれてありがとうございます！」
俺は心から感謝の言葉を発した。

第3回：そしておやじは……

栗色の髪はつややかにセミロング。すつと線を描いた眉の下の瞳は大きくまん丸でルビーのよう。筋の通った鼻梁。半円を3つ組み合わせたような唇はぷつくらとして愛らしく、頬も桃のように幼い。輪郭は程よく肉の付いた丸顔で、全体的に幼く見えるが、歳相応の落ち着きも身についた魅力的な女性。

の、写真を見ながらおやじは言った。

「へー、ほーん。で、このむすめっこか？」

「……ああ、釘谷さんていうんだ」

俺は妙に気恥ずかしくてそっぽを向いて答えた。おやじがにやにや笑っているのがわかる。

「な、なんだよ……」

「うちの娘の足元にも及ばねえが、なかなかかわいいじゃねえか」

「ど、どうでもいいだろ、そんなこと」

「で、この子をどうする？ どうしたい？ 言っとくが、おれに任

せてもらえりゃ結構なんでもありだぞ」

「どうしたいって、その……」

おやじは18歳以上って言ってたよな……。

ってことは、その……キス……とか、じゃなく、それ以上の、あんなことやこんなこともできてしまうのだろうか！ つまり、その、手を握るとか、腕を組むとか、背中から抱きしめてみたりするとか、それどころじゃなくて、その、髪を撫でたり……とか。

あー、ダメだダメだ。それだけでもドキドキもんなのに、あまつさえ耳に息をかけたとかかしてもいいのか……！

「で、なんだ。すんのか？」

「だぁー……！？」

俺はおやじのとんでもない発言をかき消すように大声を張り上げた。

魔女っ娘が家にやってこない！（親仁変）

「つはー、てめ、うるせえな、なんだってんだ、いきなり」
「それはこっちのせりふだよ！　なんだって、いきなりそんな……
とか」

「あーん？　　のこと？」

「だーっ！　だから言わないの」

「はっはーん」

おやじはしたり顔でうなづく。

「あーはいはい、お前、あれか。まだ童貞か。ガキだなあ」

「大きなお世話だ！」

「んじゃ、尚更だな。ちょうどいい機会じゃねえか。ここらで一発。
おとこになるうぜ」

妙に下世話ににやにやするおやじ。

俺は反論する元気もなくなってきた、

「違うの。俺は釘谷さんに彼女になっってくれるだけでいいの」

そうさ。あくまでプラトニックだ。彼女の笑顔がもつとそばで見
れるなら、それだけでいい。別に一緒にベッドとか……ベッド！？

いやいやいや、ベッドとか関係ないよそんなのー！

「ともかくお前とつと帰れー！」

なんかよくわからなくなつて、気づいたときには下卑た笑いを浮
かべるおやじを怒鳴りつけていた。

「なんだってんだ。まあ、そんな神経質にならんでも、契約の完了
手続きが済めばこんな小汚ねえ部屋すぐに帰るぞ」

「く。なんだ、じゃさっさと手続きしまおっぜ。どうすればいい
んだよ？」

「おれとお前がキス」

「どうぞこの部屋にいてください」

「うわー、あきらめるの早っ！」

「だって、お前！　なんでキスなんだよ！　そんなのが手続きつて
おかしいぞ！」

「だって魔法少女だもん」

「何の説明にもなつてねえし！」

「いや、だからな。おれはチャーミングな魔法少女」

「だから、あんた男だろうが」

「……の代理だ。いいから、話は最後まで聞けよ」

「妙な区切り方するからいけないんだよ」

「なんで、そんなことまで難癖つけられなきゃならんのだ。いいか、だからな、魔法界においては異性同士のキスは至上の誓いとして認識されているのだ。契約遂行の際にはキス。これは常識とともに、ルールとして定まっているのだ。で、俺は魔法少女の代理としてきているわけで、契約上は俺の性別は娘と一緒に女性ということになるのだ。つまり、そういうことなのだ」

「な、バカな……」

俺は絶望的な気持ちになった。

魔法によつて願いをかなえてもらえるという絶好のチャンスを得ながら、それにはもれなくおやじとのキスがついてくるなんて。

彼女は欲しいがおやじとのキスはきしょい。

なんなんだこのジレンマ。

釘谷さんを恋人にしたい気持ちがおやじとのキスを忌避したい気持ちを上回らない限り、決行はない。

くそうう……。

と、思ったとき、目に入ってきたのは、先月の休みに仲の良いグループで行った旅行での写真。

どうでもいい友人連中有象無象に囲まれて、俺と、ちょっと離れたところに釘谷さん。

やっぱ、かわいいなあ。釘谷さん。優しいし、おしとやかなだし。この距離をもっともつと縮められるならば！

男同士のキスも、一時の恥。

その後の花園を思えばおやじと軽くキスするくらい……。

「あ、ちなみにディープキスな。5分以上」
「絶対ありえねえ！！」

結局。

その後どうなったのかというと。

「おい、茶ーわかしてくれや」

「はいはい、少々お待ちを……って、茶くらい自分でわかせての！俺はお前の女房か！」

「失礼な。おれのかあちゃんはお前みてーな、ひょーろくだまじゃねーっての」

おやじは今も俺の部屋にいる。

なんでも女神によって派遣された魔法少女（代理でも）は願いを叶えるまで帰ることが許されならしい。そして一度仕事が始動した以上は、キャンセルなんかもできないのだそうだ。

つまり、俺がキスをしない限り、このおやじはここに居座り続けるということなのである。

なんだこの状況。

「なあなあ」

「なんだよ、おっさん」

「いい加減、腹くくってキスしちめーよ。男だろ！？」

「男だから嫌だって言ってるんだよ！」

アパートの一室に怒号が響く。

降って湧いた変なおっさんとの共同生活は当分続くようである。

「俺、なんにも得してねー！！」

第3回・そしておやじはここにいる（後書き）

2ヶ月の間が空いたけどようやく完結。本当、どうでもいい話ですがお暇つぶしにでも。

魔女っ娘が家にやってこない！（親仁変）

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1088a/>

魔女っ娘が家にやってこない！（親仁変）

2008年11月7日06時55分発行